

ごみのない美しい海岸をめざして

JEAN/クリーンアップ全国事務局 代表 小島 あずさ

貝殻拾い、潮干狩り、海水浴など、子どもの頃に海辺で過ごした楽しい思い出を持つ人は多いことと思います。記憶の中の懐かしい海辺には、どんなものが漂着していましたか？砂浜、流木、打ちあがった海藻や魚、色とりどりの貝殻などでしょうか。少なくとも、現在の海岸のように、タバコのフィルターやペットボトルが散乱したり、見ただけでがっかりするようなゴミだらけの光景ではなかったと思います。

海岸に漂着するゴミは昔からあり、地域住民が清掃したり、台風後などの大規模漂着のあとには大掛かりな回収が行われることもありました。社会的な問題としては偏在していました。しかし近年では、漂着量の増加、処理困難、重い費用負担などから全国各地から「このままではどうにもならない」と悲鳴にも似た声が挙がっています。

当団体では、地球規模の環境問題という視点にたって海岸の漂着ゴミ問題に1990年から取り組んできました。使い捨ての生活が一般化してゴミが増えたこと、その多くが自然分解しないプラスチック製品であること、川などの水路を通して生活ゴミが海へと流出し、発生地から遠く離れた場所を汚染していること、多くの野生動物に絡まりや誤食の被害を与えていることなど、漂着ゴミの問題点は多岐にわたっています。改善のための対策を立てるには、まず実態を把握し、状況を整理し、原因別の対応を図る必要があります。また、海のゴミ（海岸漂着ゴミだけではなく、漂流ゴミや海底に沈んだものも含めて）の実状を広く知らせ、発生抑制や削減のための啓発も重要です。実態把握と啓発・教育という2つの目的のために、国際規模の市民参加による漂着ゴミ調査が行われており、日本でも当団体を窓口として毎年実施されているのが、国際海岸クリーンアップ（ICC）です。

これまでの17年間にわたる調査結果からは、いろいろなことが読み取れます。

90年代はじめのころは多かった缶入り飲料のブルタブが、ステイオンタブに変わってからは激減しました。逆に、500ミリリットル以下の小型ペットボトルが自由化されてからは、飲料用プラボトルとその蓋が目立つようになってきました。長期間同じ方法で調べることによって、ゴミの様相の変化がわかり、散乱・漂着するゴミにも人びとの消費行動が映し出されていることが読み取れます。市販の飲み物を飲むにしても、容器の形状が変わるだけで散乱を減らしたり、逆にゴミとなることを助長する場合がある

という例であり、当団体では飲料業界への活動報告や改善提案のなかに、容器と一体型のペットボトルを国産の製品で実用化してほしいという要望をいれています。

海岸ゴミというと、海浜でのレジャーからの排出ばかりに目が向きがちですが、実際には、河川を通じて流入する生活ゴミがたいへん多いことも明らかになっています。ポイ捨てや海浜レジャー客だけが海辺を汚しているのではなく、私たち自身の毎日の暮らしからあふれ出るゴミの一部は、遠くはなれた海をも汚している、ということです。過去数十年にわたって、人の生活や産業の場から海へと流れ出したゴミは膨大な量だと思われませんが、特にプラスチックのゴミについては問題が深刻です。製品として使用されている間は長所であるプラスチックの安定性のよさは、不要なゴミとなってからは一転して欠点になってしまいます。分解しないゴミが海に流れ込めばどうなるか。いつまでも海洋を漂ったり、打ち上げられた浜に残り続け、誰かが回収しない限りその場所を汚し続けます。さらに最近の調査や研究では、波浪や紫外線の影響をうけて劣化したプラスチックが微細な破片となりながら、環境中に存在し続ける現実にも警鐘が鳴らされています。離島の海岸など、回収の手が回らない場所には、長年の間に溜まり続けたプラスチックが山をなし、本来の浜を多い尽くして、歩くと足元がふわふわと沈みこむようなところが、あちこちにあります。1メートル以上も積もったゴミの山を調べてゆくと、とても小さな破片になったプラスチックが層を成しており、あたりにはヘドロのような悪臭が漂います。

ゴミが小さくなればなるほど、目立たなくなるので回収されにくくなりますし、問題意識も持ちにくくなります。実際に回収しようとしても、一粒ずつ捨てることは無理です。海岸全体の砂をふるいにかけるような作業が必要になり、とても現実には実行不可能でしょう。小さくなったからといって土にもどったわけではなく、プラスチックとして存在し続けていますので、プランクトンや魚卵などをえさにする鳥や魚による誤食の可能性が高まるという指摘もあります。

海の中もまたしかりです。カリフォルニアの沖合いで、プランクトン調査用のネットを用いて回収し、自然の動物プランクトンと、それと同じくらい小さくなったプラスチックゴミの破片の割合を重量で比べたところ、プランクトン1に対してプラスチックゴミ6、という結果でした。調査をおこなったアメリカ

カのNGOアルガリタ海洋研究所のチャールズ・ムーア所長によれば、同調査では小さなプラスチック破片が体内に入り込んでいる原索生物も見つかったとのことで、今後この問題が未来世代にどう影響していくのかを思うと心配でなりません。

日本では古くから住民参加によるクリーンアップ活動が盛んですが、現状はもはやクリーンアップだけで解決できる範囲を超えています。もちろん、今すでに海岸にあるゴミは速やかに回収し、適正処理して、海への再流出を食い止めることもたいへん重要です。クリーンアップ活動は大切です。しかし拾っても拾ってもまたゴミが流れ着く現実、長年向き合い続けるのはたいへんなことですし、最近では医療廃棄物などの危険な漂着物も多くなってきましたから、ボランティア任せの活動には限界があることを、行政がきちんと認識してほしいと思います。

またクリーンアップ活動の促進と同時に、ゴミの発生そのものを押さえることが非常に重要です。単なるポイ捨て防止を呼びかけるような実効性の薄いやり方に甘んじるのではなく、本気で人々の行動が変わるような広報や啓発教育が必要だと痛感しています。



親鳥にえさと間違ってゴミを与えられて死んだ、コアホウドリのヒナの死骸の中に残っていたプラスチックゴミ（ヒナ3羽分）

「未来の海のために」

当団体では5年ほど前から、韓国のNGOや研究機関との連携・協働を進めてきました。韓国では海のゴミ問題への認識がたかまって取り組みが始まったのは、2000年頃からとのことですが、政府系の研究機関とNGOが協力してのモニタリングや、その結果をもとに政策を提言したり実現する行動力の大きさと、対応の早さには眼を見張るものがあります。

一例では、漁業の操業中に網にゴミがかかった場

合、漁民が陸にあげると自分が出したゴミでなくても処理費を負担しなくてはならないため、また海に捨ててしまう現実がありました。それに対して、政府が海底に蓄積したゴミを大掛かりに回収して漁場環境の回復をはかるのと同時に、網にかかったゴミを漁民から買い取る制度を実施しています。海底ゴミ回収後は、年々落ち込んでいたその海域の漁獲量が回復し、漁民自身が「海にゴミがないことは漁業とっても良いこと」だと身をもって実感することができました。買取制度のおかげで、海への再投棄が減っているそうです。しかし、漁民だけを特別扱いにすることをずっと続けることはできません。そこで、今後はNGOの協力の下に、漁民への環境教育プログラムを実施し、受講した漁民から買取を行なうなどの仕組みを整えていくとのことです。それが実を結べば、買取制度がなくなったらまた海をゴミに捨てるようになってしまう心配はなくなるでしょう。

日本でも岡山や神奈川の一部の漁協で、同様のゴミ買取制度が行なわれていますが、広く日本全体に広げるためには、全国規模の水産関係団体や国からの協力・支援がなくては難しい面があるとおもいます。

また、韓国では農村地帯下流の河口付近には、農薬や肥料袋などの農業系のゴミが多く流れて来ているので、漁民への対策と同様に農民に対する教育プログラムも開発していく予定だと聞いています。

日本では環境教育というと子どもたちを対象とするものが主流ですが、海のゴミ問題については、韓国の例のように漁業、農業など産業別の対策プログラムや、一般の大人向け、女性を意識したもの、男性を対象とするものなど、きめの細かいプログラムを作っていく必要があると思っています。

私たちは、長い間プラスチックの利便性だけを見て、安いからと使い捨て資材に多用してきました。ゴミ問題全般にいえることでもあります。ゴミになってからどうするか考えるのではなく、本来であれば最初から使い方や廃棄の仕方などをきちんと考えた上で利用すべきだったのです。過去数十年にわたって海に溜まり続けてきた私たちのゴミが、今後どうなっていくのか、今の段階では知ることができません。だからこそ、海の広さや、自然の浄化力に勝手な期待を押し付けるのではなく、現代人として今できる責任を果たすべき時であると思います。個人においては使い捨てや大量消費をつつしみ、社会においては発生したゴミをすべて回収し、可能な限り再利用する仕組みを早急を実現させなくてはなりません。後者にはまだ時間がかかるとは思いますが、前者は今からでも実践できます。

明日から、といわず今日から、一人ひとりが自らの行動を変えることが、未来の海を守ることにつながっていると思っています。